

◆無くなる映画館 仙台駅東口の映画館「チネ・ラヴィータ」閉館

「残念でたまらない」ファン集う

「JR仙台駅東口の映画館「チネ・ラヴィータ」(仙台市宮城野区)が31日、20年の歴史に幕を下ろした。閉館を惜しみ、多くの映画ファンが訪れた。最終日は閉館企画として大作「RRR」などのインド映画4作、それ以外に11作を上映。特製の長袖Tシャツも販売した。複数の映画を見た青葉区の介護士横尾和樹さん(34)は「ここで月に20作近くを觀賞していたので、閉館を知った際は泣いた。駅から近く、ドキュメンタリーや芸術性に優れた映画も多数上映していたので閉館は残念でたまらない」と話した。

チネ・ラヴィータは、フォーラム運営委員会(山形市)が運営。経営環境が厳しくなり、賃貸借契約の満了に伴い閉館を決めた。今後は姉妹館のフォーラム仙台(青葉区)に営業を集約する。長沢純代表取締役は「できるだけのことをやった末の閉館。今月中旬ごろには、フォーラム仙台で飲食物の販売を始めるなどサービスを充実させる。良質な映画を厳選して上映していきたい」と話した。」(「河北新報デジタル」2024年3月31日)

◇続ける映画館 【建物語】本宮映画劇場・本宮市 待ち続けた「復活の時」

「鬼滅の刃(きめつのやいば)」が大ヒットを記録する映画産業。かつて同じように多くの人に娯楽を届けた映画館が本宮市にある。JR本宮駅から徒歩5分、住宅街の路地裏にある「本宮映画劇場」だ。栄枯盛衰を経てあせたピンク色の壁は、何げなく立ち寄った人を引き付ける。歴史は大正時代にさかのぼる。館主の田村修司さん(83)によると、建てられた当時の名称は「本宮座」。旧本宮町の大地主で県議会議長や町長、衆院議員を務めた小松茂藤治(もとうじ)を中心に有志が集まり、歌舞伎座兼公会堂として、1914(大正3)年に木造3階建ての劇場が建てられた。

「『定舞台(じょうぶでい)』と親しまれ、終戦後は芝居小屋だった。大衆演劇なんかを見せていて、梅沢富美男さんの父の劇団も巡業で来た」と修司さん。選挙演説や町の表彰式にも使われ、町民に親しまれていた様子が館内のモノクロ写真から伝わってくる。映画上映は、45年に修司さんの父寅吉さんが経営者となり、映写機を備え付けたことで本格的に始まった。本宮座から本宮映画劇場に改称されたのは、この時だ。

しかし、いい時は続かなかった。60年代に入るとテレビの普及で映画は衰退。人を集めようと大人向けのピンク映画も上映したが、評判は良くなかった。「フィルム代も厳しくなった。『借金も軽いうちに』と思って」。63年、修司さんが27歳の時、閉館した。

修司さんは車のセールスマンに転身。しかし、「定年後にまた人を入れて映画を見せたい」と捨てきれない夢が残った。約3年で借金を返すと、休日は館内にこもり、映写機に油を入れ、フィルムを手入れし、館内を清掃。銀幕に映画がよみがえる時を待って、命を吹き込み続けた。ただ、現実は厳しかった。定年を迎えた時は「浦島太郎のように周りは年寄りばかり。復活は無理だと思った。現在、映画館では年に2～3回、上映会が開かれる。修司さん

は日々の手入れを欠かさない。「ずっと空っぽだった場所に人が入ってくれるのはうれしい。映画は自分の生きがい」。館主とともに映画館は生き続けている。(佐藤智哉) (「福島民友」2021年01月31日付け)



【無くなる映画館—“チネ・ラヴィータ” (仙台駅前)】 (2024年2月26日撮影)



【続ける映画館—“本宮映画劇場” (福島県本宮市)】 (2024年3月10日撮影)